

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成29年度技術情報第13号(イチゴのハダニ類)について(送付)

イチゴのハダニ類について情報を取りまとめましたので送付します。ハダニ類の発生が増加しています。さらに発生が増加することも予想されますので、今後の発生に注意して下さい。

平成29年度 技術情報第13号

1 農作物名 イチゴ

2 病害虫名 ハダニ類

3 発生状況

(1) 発生地域 県本土

(2) 発生量 多

4 情報の根拠

(1) ハダニ類の10月の発生ほ場率は53% (平成27年32%) で平成より高く(図1)、過去10年では2番目に高い(図2)。また、発生程度の高いほ場も認められている(表1)。本年は8月が高湿乾燥で推移し、特に屋根かけほ場での発生が多い傾向にある。

(2) 10月に発生が多かった年(平成27年、24年)のその後の発生ほ場率は、いずれの年も平成より高く推移しており(図3)、本年においても注意を要する。

5 防除上注意すべき事項

(1) 天敵を放飼するほ場では放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、防除を徹底する。

(2) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(3) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

(4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(5) カブリダニ等の天敵を用いる場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(6) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。

6 調査結果

【巡回調査結果】

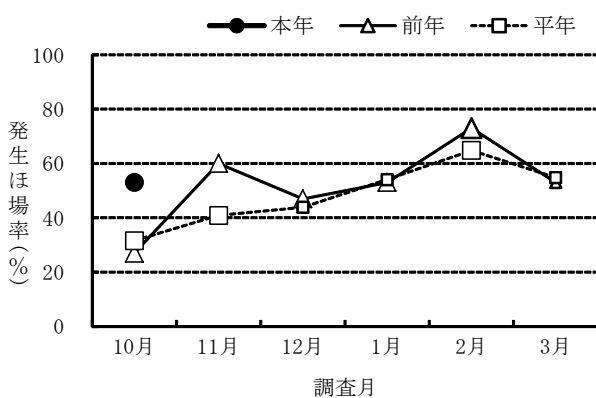


図1 ハダニ類の発生ほ場率の推移

表1 10月の発生程度別ほ場数(ハダニ類)

調査地点	ほ場数	発生程度 ^{a)}				
		甚	多	中	少	無
日置市	4	1	2	1		
さつま町	4					4
志布志市	7				4	3

a) 発生程度(寄生株率) 甚: 96%以上, 多: 71~95%, 中: 41~70%, 少: 1~40%

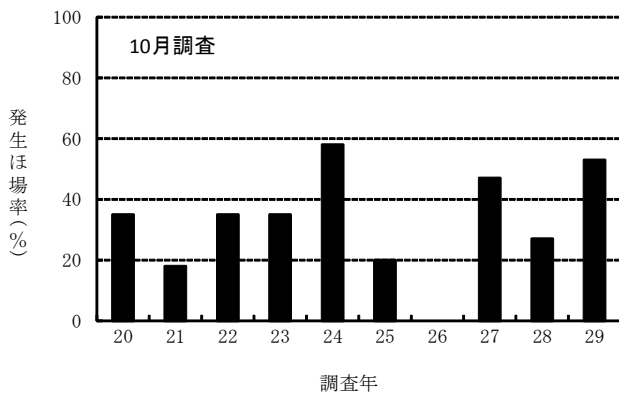


図2 ハダニ類発生ほ場率の年次比較

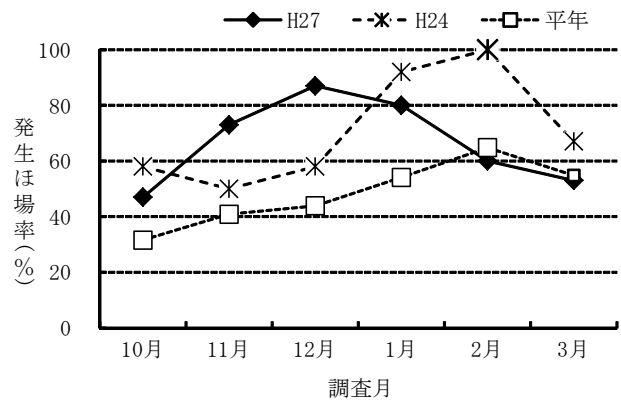


図3 多発年の発生ほ場率の推移

【参考：各種薬剤のナミハダニに対する殺卵効果】

試験方法：イチゴほ場から採集した雌成虫をインゲン葉片（4 cm×4 cm）に3～5頭ずつ放飼し、72時間産卵（3反復合計で47～124個）させた。これを水道水で希釈した薬液（ブレイクスルー、5000倍を加用）に10秒間浸漬し、浸漬5日後に孵化状況を調査した。なお、インゲン葉は産卵期間、薬液浸漬から調査までシャーレ（直径6 cm）に水分を含ませた脱脂綿を敷いて、その上に置き25℃に設定した室内に静置した。

表2 ナミハダニに対する各種薬剤の補正殺卵率（平成28～29年）

供試薬剤名	作用機構分類	供試倍数	日置市		さつま町	薩摩川内市	志布志市
			A	B	C	D	E
ダブルフェースFL	25B・21A	2,000	0.0	75.3	81.3	55.8	14.5
スターマイトFL	25A	2,000	76.0	87.0	85.4	36.6	35.1
ダニサラバFL	25A	1,000	0.0	-	0.0	0.0	0.6
カネマイトFL	20B	1,000	23.0	71.3	58.2	50.0	82.9
バロックFL	10B	2,000	0.0	-	2.0	0.5	0.0
サンマイトFL	21A	1000	0.0	-	3.2	0.0	4.7
ニッソラン水和剤	10A	2,000	0.2	-	0.0	6.6	2.6
テデオンの乳剤	12D	500	37.8	24.6	30.5	52.5	44.8
コロマイト乳剤	6	1,000	58.2	45.5	10.9	9.6	12.6

注1) 殺卵効果のみの調査のため、実際のほ場での防除効果を示すものではない。

注2) 殺卵効果はほ場毎に傾向が異なっている。

注3) コロマイト乳剤：イチゴ親株床での適用。

注4) 作用機構分類：IRACグループ表示